

救われた目的(3)

2009.9.8(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

エペソ人への手紙 4章13節から15節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばされたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。

コリント人への手紙・第一 9章26節、27節

ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

今日は三回目ですが、一つの問題について考えました。「私たちが救われた目的は何のためなのでしょうか」。

どうして救われたのでしょうか。もちろん「生ける希望」を持つためです。揺るがない確信を得るためです。行く先は決まっています。「天国だ」と。しかし、そのためだけではないのです。

確かに最も大切なこととは、「救い主を持つ」ことです。「イエス様を体験的に知る」ことです。私たちは「救いの神」を知ることを通して初めて、この地上においての本当に満たされた生活をするのできるのです。そして満たされた人生を送るためには、永遠のいのち、主なる神との平和、罪の赦し、つまりイエス様が私のことを心配してくださり、良い牧者として導いてくださるという確信を持つことこそが、信じる者に与えられている大きな喜びのもとなのです。

更に死んだ後は、永遠にイエス様と交わり、栄光をともにすることになるという確信こそ、最高の宝物なのではないでしょうか。いつまでも主イエス様とともにいるという事実について考えると、私たちには考えられない、想像することもできないことですが、このことこそ主を礼拝せざるを得ない根源となるのではないのでしょうか。

では救われた目的とは何でしょうか。パウロが常に持っていた目的とは何であるかと言いますと、乳飲み子の世話をするのではなく、信者たちが「全き人」となることでした。先ほど読んでいただきましたエペソ書4章の箇所を見ると分かるでしょう。もう一度読みます。

エペソ人への手紙 4章13節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

と記されています。イエス様を知ることは「恵み」です。しかし、私たちがイエス様のために用いられる器となるためには、イエス様を自分の主として、また支配するお方として体験的に知ることこそ考えられないほど大切なのです。

では救われた目的とは何でしょうか。ある聖書の箇所を読むと分かります。永遠の勝利としての報いの冠を得るため、或いは、主の勝利にあずかるためです。しかし、その道は散歩道ではなく戦いの道です。

パウロが、ネロという皇帝によって、殺される少し前に書いたのです。

テモテへの手紙・第二 4章7節

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

このように言える人は幸せなのではないでしょうか。その前にパウロは、エペソの長老たちに出会った時、言いました。

使徒の働き 20章24節

「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

と。

このような箇所を読むと、パウロは死の恐怖につながれていた奴隷ではなかったのです。「私のいのちはどうでもいい。私はイエス様に従いたい。イエス様を深く知りたい」と。

けれども、これは今話しましたように「戦い」です。この戦いについて、よく知られているヘブル書12章の中にも書かれています。1節、2節を読みましょう。

ヘブル人への手紙 12章1節、2節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者で

あり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

イエスから目を離さないことこそ、一番大切なことなのではないでしょうか。

パウロはおもに三つの異なったギリシヤ・ローマ時代の競走について書きました。先週私たちは、パウロの言っている「競走」について考えました。今日は、第二番目の「拳闘」について、考えてみたいと思います。

ギリシヤ時代の競技の主な種目の二番目は、「ボクシング」即ち、「拳闘」でした。これは最も激しい競技の一つでした。これはボクサーが互いに打ち合い、特に顔を打つことを目的とするところに、その本当の面白さがありました。既に、有名なホーマーの時代、即ち紀元前900年頃、皮のグローブを手にはめ、時には金属を着けたので、非常に危険な競技であり、死者が出るほどでした。決定的なパンチは目の下を打つことであり、それはこんにちノックアウトと呼ばれているようなものだったのです。そしてパウロは、この表現を用いているのです。先ほど読んでいただきましたコリント第一の手紙の9章26節、もう一度読みます。

コリント人への手紙・第一 9章26節、27節

私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしていません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

これはあり得ることです。ここで、「自分のからだを打ちたたいて服従させる」とは、自分自身のからだにパンチを与え、特に目の下にパンチを与えることによって、自分のからだを完全にノックアウトさせることを意味しているのです。即ち、これは次のことを語っています。キリスト者は自分のいのちを少しも惜しいとは思わない、ということです。

もし自分中心の考え方、自分だけの願いや欲望、安楽な生活を送ることや、快樂を求めることが、自分にとって勝利を勝ち取るために妨げとなるなら、それらのものはっきりと否定しなければなりません。それは自分の拳が傷つくのをおそれ、敵を打つ代わりに空を打つようなことは決して許されません。そのような拳闘は、いずれにしても勝利を得ることができないことは確かです。この戦いについてパウロは、先に読みましたように素晴らしい態度をとったのです。「私のいのちは少しも惜しいとは思いません」と。もちろんパウロは、ここで禁欲生活や、修道院生活を勧めているわけではありません。むしろ競技者としてすべての力を、全身全霊をもって、ひとつの大きな目標に向けるということなのです。その態度のとり方により、勝利を得ることができるのです。

パウロはここで、「霊肉の戦い」について述べています。新約聖書ではいろいろなとこ

るで、霊と肉との対立について述べられています。例えば、ローマ書 8 章を読むと、次のように書かれています。

ローマ人への手紙 8 章 4 節から 9 節

それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

キリストの御霊を持つこと、聖霊の宮になること、神の住まいになることこそ要求されているのです。「まことの救い」とはそういうものです。そしてガラテヤ書の中で、また次のように書かれています。

ガラテヤ人への手紙 5 章 17 節

なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

信じる者、救われた人々に書かれたことばです。ここで「肉」という場合は、単に、主イエス様に逆らう罪深い肉欲のことだけではなく、人間の生まれつきの古い性質について語られているのです。

ガラテヤ人への手紙 5 章 19 節から 21 節

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。

パウロは、このようにガラテヤにいる兄弟姉妹に書いたのです。彼の挙げた肉のわざの半分以上は、まさに精神生活の「罪」の領域に属します。単に、不品行、汚れ、好色だけが肉のわざではないのです。敵意、ねたみ、争い、愛のないこと、更にはまじない、偶像礼拝、更に律法的になることや、禁欲主義なども肉のわざにほかなりません。コロサイにいる人々も、やはり戦いました。コロサイ書の 2 章を読むと、また次のように書かれています。

コロサイ人への手紙 2 章 16 節から 23 節

こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、「すぎるな。味わうな。さわるな。」というようなために縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。

例えば、不品行と禁欲主義とは、表面的には正反対のものではないでしょうか。けれど、主の御目から御覧になると、一つのものの両面に過ぎません。言葉を変えるならば、淫らな卑しい肉のわざだけでなく、謙遜らしく信心深くカモフラージュされた肉のわざも、全く同じものです。なぜなら主イエス様に頼らないで、自分自身の力で成そうとすることは、全部罪だからです。

ガラテヤの兄弟姉妹は、律法的な行ないをして自分自身を清めることにより、自分自身を完成させることができると考えていました。パウロはこのような宗教的な努力に対して次のように書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 3章3節

あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。

このような意味において、霊と肉、即ち「古き人と新しい人」、つまり「古いいのちである自我」と、「生まれ変わった新しいいのち」との間には、常に対立が存在します。

ガラテヤ人への手紙 5章17節

なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

飲酒や、快楽を求めること、或いは、官能的な生活の奴隷等は、すべて彼をいつも欺き、支配者として、この明らかな事実の力を経験しています。これが、「肢体に存在する罪の法則」です。

ローマ書の7章23節を読んで分かることは、パウロは自分の経験についていろいろなことを書いたのです。この7章の中で、二十何回も私、私、私という言葉が出てきます。結局、私、私と考えるとうまくいくはずがないのです。それはイエス様から引き離されることになるからです。

ローマ人への手紙 7章23、24節前半

私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。

主の恵みによって救われたパウロの証しです。サタンの働きとは、人間を捕らえ、罪のもとにがんじがらめに縛りつけ、そして虜にすることにより、「死」のための実を結ばせようとしていることなのです。

ローマ人への手紙 7章5節

私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。

罪は、からだの肢体を乱用し、私たちの肢体を不義の武器としたりがっています。

ローマ人への手紙 6章13節

また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

とあります。「罪」は、私たちのからだを用いてそれを武器とし、主イエス様に逆らおうとしているのです。私たちの目、耳、舌、手、要するにからだのあらゆる肢体を、この敵は自分の目標のために使いたがっています。このようにして、人間のからだは卑しめられてしまいます。つまりそれは、悪魔に用いられる器となり、罪のからだとなります。

ローマ人への手紙 6章6節

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

ローマ人への手紙 7章24節

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

人間のからだは、悪魔の武器となり得るのです。

ローマ人への手紙 6章13節

また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

結局、裁きがなされる復活の時には、「滅びのからだ」になり下がってしまうのです。ダニエルは、次のように書いたのです。

ダニエル書 12章2節

地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。

もちろんイエス様も全く同じことを言われました。

ヨハネの福音書 5章29節

「善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」

では、イエス様のものになった者は、何をなすべきでしょうか。私たちは聖なるエネルギーを用いるべきです。私たちはあらゆる罪深い本能的な生活に対して、ノーと言うべきです。私たちは霊を汚すあらゆるものから目をそらすべきです。また、すべての悪口や、意味のない無駄話などに対しては耳をふさぐべきです。ヤコブ書は、この問題に対していろいろ書きました。

ヤコブの手紙 3章7節、8節

どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています。しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。

ヤコブの手紙 3章10節

賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。

と、ヤコブは当時の信じる者に書いたのです。また、怒りに満ちた罪深い価値のないこと、即ち呪いではなく、祝福を語るように自分の舌を慎むべきです。

私たちは、イエス様に逆らう自分自身のからだを打ちたたき、それを完全に支配すべきです。私たちは、ちょうどボクサーがリングで敵にするように、自分自身の目の下にパンチを与えるべきです。つまり、私たちは自分自身をノックアウト、KOさせるべきです。或いは、イエス様ご自身が山上の垂訓で命令しておいでになるようにすべきです。マタイ伝5章です。みなさん何回もお読みになった箇所ですが、この箇所を読むと、やはり大変な戦いだと分かります。

マタイの福音書 5章29節、30節

「もし、右の目が、あなたをつまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。」

とイエス様は言われました。「ゲヘナ」とは、即ち地獄です。

もちろんパウロも、コロサイにいる兄弟姉妹に同じようなことを書き記したのです。

コロサイ人への手紙 3章5節

ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。

それと同時に、私たちは次のようなことをも体験するでしょう。即ち、肢体に存在する罪の法則を克服することによって、からだは卑しめられず、むしろ清められ、高められるのです。人間のからだは実際問題として「聖霊の宮」である、と聖書は述べています。

コリント第一の手紙6章19節を見ると、はっきり書いてあります

コリント人への手紙・第一 6章19節

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

人間のからだは、「義の武器」であるべきです。

ローマ人への手紙 6章13節

また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

とあります。人間のからだは「生きた聖なる供え物」であるべきだと、パウロはローマにいる兄弟姉妹に書いたのです。

ローマ人への手紙 12章1節

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

人間のからだは、「主の栄光を現わす手段」であるべきです。

コリント人への手紙・第一、6章20節

あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

人間のからだは、よみがえりの時には栄光のからだに変えられるようになります。いわゆるよみがえりの書であるコリント第一の手紙の15章を見ると、詳しく書き記されています。

コリント人への手紙・第一 15章43節から47節

卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせられ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらせられ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

「最後のアダム」とは、イエス様のことです。

人間のからだそのものは、決して主に反するものではないのです。それゆえに、あえてそれを否定する必要はありません。そうではなく、むしろ逆に主が造られたものとして、人間の精神と同様に、からだも肯定されなければなりません。けれど、私たちのからだはしばしば罪のために、悪魔の道具として用いられる危険性があるので、絶えず打ちたたかなければならないのです。

先にも言いましたように、からだを打ちたたたくということは、からだそのものが悪いということの意味しているのではなく、本来人間のからだに果たすべき機能と役割とを正しい状態におくなら、そのことによって真の自由を得ることができるということです。罪は低くされ、神聖さは高められます。罪は私たちの恥であり、神聖さ、清さは私たちの名誉です。このことは、私たちの魂と精神だけではなく、肉体についてもあてはまることです。

ですからからだを打ちたたたくことは、からだを駄目にしてしまうことではなく、むしろ反対に、からだを助ける役割を果たすのです。人間のからだは、罪の道具として用いられないようにするため、絶えずからだを打ちたたき続けなければならないのです。主が創造された私たちのからだは、主の道具として用いられることにもなることを忘れてはなりません。

からだは、非常に大きな使命を持っています。それは精神の道具です。このからだを通して、私たちは外の世界と交わりを持っています。私たちを取り巻く周囲の人々は、私たちのからだが行動することによって、私たちがどのような者であり、何を考えているかということを知ることができ、正しく理解することができます。例えば、話したり、書いたり、動いたり、行なったり、目の動きであるとか、顔の表情やジェスチャー、更には自分のからだの形、人の歩き方や働き方、食べ方や飲み方を通して、周囲の人々は私たちのことを理解すること

ができます。もしもからだが無かったなら、周囲の世界は何も分からない謎です。したがって私たちのからだの肢体は、義なる主の道具として次のことを明らかにするために用いられるべきです。

「イエス様は生きておられます」、「私たちは、イエス様を通して、生きておられる救い主と出会うことができます」、「イエス様だけが私たちを罪の支配から解放し、死の恐れから解き放ってくださる唯一のお方です」、「イエス様は復活されたお方であり、新しい永遠のいのちを私たちに与えて下さったお方です」、「イエス様は私たちのいのちそのもののお方です」と。

パウロは、コロサイにいる人々に書いたのです。

コロサイ人への手紙 3章4節

私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

つまり、初代教会の喜びの秘訣とはそれでした。「私たちのいのちであるキリスト」。イエス様とは、私たちにとってすべてのすべてなのです。

ピリピ人への手紙 1章21節

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

パウロは、このからだのことにについて、「主イエスのいのちが、この身に現われるためである」とはっきり言っています。

コリント人への手紙・第二 4章10節

いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

そして、イエス様のいのちが、私たち自身のからだを通して完全に現わされる、と聖書は述べています。聖書の約束によると、人間のからだも将来に対して希望を持っています。現在のからだの清めも大切ですが、それは同時に、将来の変容をも意味しているのです。

ローマ書8章11節を見ると、次のように書かれています。

ローマ人への手紙 8章11節

もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かして下さるのです。

ですから最後の勝利を得るために、現在私たちのからだは清められなければなりません。パウロは、ピリピ書3章の中で次のように書いたのです。「私たちは競技場で一生懸命に戦うことが必要です。それは単に救われる問題だけではなく、神の勝利を得るために必要

なものです」と。

ピリピ人への手紙 3章12節から14節

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

そして最後に、「私たちのからだは、イエス様の栄光のからだと同じ形に変えられる」と語っています。

ピリピ人への手紙 3章20節、21節

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

ギリシャ時代の第三の競技種目は、「レスリング」即ち、日本の相撲のようなものでした。この種目は二人が互いに取っ組み合って相手を倒し、地面にからだをつけることによって勝利を決めたのです。パウロは、エペソ書6章12節で、この戦いについて述べていますが、それは両者が非常に接近して手づかみで戦うほどの白兵戦、或いは肉迫の戦いを意味しています。

エペソ人への手紙 6章12節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

「血肉」とは、目に見える世界、或いは人間のことです。

パウロは、私たちの敵を無視することは許されないということを知っていたのです。闇の力に対して真剣に取り組もうとしない者は、悪魔の奴隷となり、その結果、狂信的になるような犠牲を自ら招くこととなります。この狂信的な状態に入ると、自分自身が盲目になり、思い上がり、その危険が分からなくなり、ものを見る目が濁ってしまい、倫理道德、その他主イエスに対する正しい態度が間違っただけのものになるのです。そのような状態が続くと、私たちの信仰は駄目になり、それを見た敵は、ある時に突然攻撃を加え、肉の罪を通して私たちを打ち負かそうと試みます。それはまさに肉の罪がもたらす結果です。以前にはイエス様に祝福された兄弟姉妹が、このような状態に陥って悪魔の攻撃を受けたために信仰が駄目になって破船を来たせられた例が決して少なくないのです。

それゆえにパウロは、その敵を見失ってはならないと警告したのです。私たちは、その敵がすぐそばにいることに対して、絶えず目を覚ましていなければなりません。そして、その敵との戦いに勝たなければなりません。その敵は私たちを戦い潰そうとあらゆる誘惑を試みるに違いありません。その敵を決して忘れてはなりません。私たちは常に戦う者であるべきです。その戦いをする時に、私たちは決して落胆してはいけません。なぜなら、イエス様が御臨在しておられ、共に戦ってくださるからです。イエス様は、この敵よりもはるかに強いお方です。ですから、私たちは主のみことばの武具で身を固め、主の偉大な力によって強くなるべきです。そしてその戦いに勝利者となるべきです。

この敵との戦いで、最後には必ずイエス様の力によって敵が大地に叩き潰され、負けることが決まっています。この闇の力との戦いで最も大切なことは、言うまでもなく「祈り」です。この祈りは、単に生けるまことの神の子となった私たちが、天の父なる神と話し合うことだけではなく、また主イエス様の御名を呼び求めたり、褒め称えたりすることではありません。また、単に礼拝をしたり、与えられた祝福のために感謝したりすることでもありません。また、求めるところをイエス様に申し上げることだけでもありません。

ピリピ書 4章6節。よく読む箇所です。

ピリピ人への手紙 4章6節

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

真の祈りは、上に述べたことと共に、更には闇の力に対する戦いをも意味していることを、忘れてはなりません。聖書はいろいろなところで祈りの戦いについて述べています。このように祈りの中で共に戦い合う兄弟姉妹は、こんにちどこにいらっしゃるのでしょうか。

もし、そのような祈りの戦いをしないならば、悪魔は私たちを眠りこませ、その策略の中に落とし込ませようとするに違いありません。けれど、いついかなるところにおいても、祈りの戦いによって悪魔に打ち勝った本当のキリスト者がいたことは歴史的な事実です。本当に祈る人は、悪魔よりも強いのです。祈りこそ悪魔が手出しすることのできない真の力です。

ここで一つ、ドイツの教会にある絵のことを少し話したいと思います。それは、天秤の片方の皿の上で一人の子どもが祈っており、反対側のお皿には重りが乗っている。しかもその大きな重りの上には三人の悪魔の使いがそのお皿を下に押し下げようとし、その皿の下には二人の悪霊が同じくそのお皿を下に引き下げようとしています。しかし、悪霊たちがいくら一生懸命になっても、上にあがってしまったお皿を下に動かすことはできません。このように祈りの力が悪霊たちよりもはるかに強いものであることを、この絵を描いた人は表わそうとしたのではないかと思います。

一人の子どものような祈りの力は、全世界の悪霊の力よりもはるかに強いのです。「信仰をもって祈る」ことは、悪魔の攻撃やこの世の権威などよりもはるかに力があります。

信仰は主イエス様の力であり、あらゆる悪魔の力よりも勝っているものです。ですから、ヤコブ書の中で、5章16節に次のように書かれています。

ヤコブの手紙 5章16節

ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。

祈る者は即ち勝利者です。別の言葉で表現すれば、主イエス様ご自身こそ真の力です。イエス様は単に最後の審判者であられるばかりでなく、競技場で競技をする者の力であり、泉です。イエス様は、私たちに次のことを命令しておられます。

あなたがたは、競技者、競走者となりなさい。そして、いつも上にある目標を見ながら走りなさい。枝葉のことはかまわずに、ただ上にあるものだけを見つめて走らなければなりません。本当のボクサー、拳闘家となりなさい、と。パウロが言っているように、自分のからだを打ちたたきながら走ろうではありませんか。そしてまた、本当のレスラーとなりましょう。この戦いは決して血肉に対する戦いではなく、目に見えない世界に対する戦いなのです。

このように三つの命令があります。競技者、拳闘家、レスラーとなりなさい、と。

主の命令は、決して私たちにとって不可能なことを要求することではなく、その命令を守り従うための備えの力を常に与えてくださるものです。

この戦いの秘訣は、イエス様の「十字架」です。この十字架が、もし単なる教えであるならば役立ちません。しかし、イエス様の十字架は、実際に私たちの生活の中に入り込んでくるものであり、それを私たちは日々、体験的に知ることができるのです。

私たちのために十字架につけられたイエス様だけが、私たちの「本当の主」であられ、「支配者」であられ、私たちはその事実を日常生活の中で体験することができるのです。

私たちにとって、「信仰生活」と「日常生活」は一体とならなければなりません。もし、上からの力が日常生活の中で私たちを動かす原動力となるならば、本当に幸いです。

了